

高校での「研究学習」の実践と成果

世良 清*1

Email: sera.nagoya@gmail.com

*1: 三重県立津商業高等学校

◎Key Words 知的財産, 知財教育, 高等学校学習指導要領, 現代の国語

1. はじめに

大学生のレポート提出において、窃用が問題になって久しい。複数提出されたレポートの多くが、内容や表現が酷似し、あるいは1つのレポートのなかで、文体や文調が異なるなど、明らかに、提出者が自ら執筆したとは思えないものが散見されるようになった。インターネットで検索した他者の著作物から安易に引用したものと考えられる。近年は、高校の授業でもアクティブラーニングの進展により、レポート提出を課すことも増加してきており、窃用の問題は、高校生にも見られるようになった。著作権の法的な知識は一定程度普及している一方、倫理観の欠如と断定するだけでは済まされない状況にある。これらの問題解決を緊急に図る必要がある。

高校までの国語の授業では文芸作品の鑑賞や、小論文の執筆指導はあるが、それらは、他教科の実践報告執筆と関連付けて指導されなかったからではないのかという課題意識に基づき、報告者は、知財教育の一環として「研究学習」の成立に向けて取り組んだ。

2. 研究学習

筆者は、知財教育の一環として「研究学習」の実践に努めている。レポートの窃用の増加は、学生自身の著作権の知識の欠如や悪意もあるが、レポートを執筆する学習の指導不足によるものも多いと考えられる。それは、単に小論文を執筆するのではなく、仮説を立て、実証的な考察を行うといった「研究学習」を深化させる体験がないことにある。

学校での研究体験は、発達段階に従うと、小学校の「自由研究」で百科事典の丸写しが容認され、中学校では、例えば、新聞の切り抜き集のように、データ収集に終始している場合がある。さらに、高校生となると、生徒自身が、仮説を立て、調査分析を行い、考察するといった研究の基礎基本を体験的に習得するべきだが、その機会は極めて少なく、「受験用の小論文」の指導に終始している。

そこで、筆者は国語の授業ではなく、著作権を学習する上での体験活動として、一切の引用をしないで小論文を執筆する指導を行った。引用の仕方や要約の仕方、それらの必要性について説明し、実際に添削指導を行った。当初は、生徒は自己の意見を持たず書籍からの引用であったり、あるいは、文旨が一貫しないものも多かったが、推敲指導を進めるに従い、自分の言葉で書き表せるようになっていった。これを経て、研究文の執筆に移った。先行研究の把握から始まり、仮説を立て、企画・実践、検証、課題の整理と順を追って、書き進むことを体験させた。こうして、「研究学習」を推し進めてきた。

3. 小論文の指導事例

小論文の執筆指導は、口頭発声することを前提とし、実際に全国高等学校総合文化祭弁論部門に出場した4件の事例を紹介する。なお、著作者の氏名表示権や同一性保持権などの著作者人格権を順守するため、原文のまま引用する。

3.1 事例① 「一本の木」

執筆開始から、概ね1月をかけて推敲を重ねた。演題とその背景となる事情は口頭で簡単に説明したが、話題の展開は、周囲の友人らと相談し、自らの力で完結させることができた。

「一本の木」 稲垣すみれ

緑を揺らして立っている“一本の木”。ただひたすら、何も言わずに校庭に存在しています。でも私は、何もなかったはずのその木にある、歴史を知ってしまったのです。

私がちょうど高校生になる2年前のこと、“一本の木”は切られそうになっていました。隣の企業が駐車場を広げるため、津商業から買い取った土地の木を無くしたいと言ってきたのです。しかし、学校の先生方は「昔からある木を人の都合のために切り倒すのは、伝統を切り倒しているのと同じではないか」と憤慨しました。そこで、先生方は“一本の木”を残すため、記念樹であるかどうかの調査をしました。調査の結果、“一本の木”は記念樹ではなく普通の木であることがわかりました。もう残されないのではないかと先生方は思っていました。が、先生方の熱意を見た企業が、木を別の場所へ移すことを条件に、お金を出すということになりました。そうして今“一本の木”は、駐車場ができた場所から100m程離れたグラウンドに根をはっています。こんなノンフィクションのお話があったのです。残したいと考える人がいれば、そこには結果として何かが残ります。ここでは“一本の木”が残りましたが、人間も同じではないでしょうか。

私の中学時代の吹奏楽部での話に置き換えて考えてみます。私は演奏が下手で、直近の先輩からそれを非難され、もうやめてしまいたいと思うほどに追い詰められていました。しかし顧問の先生は、私の話を聞いてくださったり、悪い点は何かを一緒に考えていただいたりしました。親や友人からは「部活を辞めると後悔するよ」と言われました。私は皆の思いが感じ取れて「もっと努力しよう」という気持ちになりました。そうして多くの人に支えられて演奏は成長し、その先輩からも私を部長に推薦するという形で認めてもらい、なんとか

3年間部活動を続けることができました。多くの人の思いを感じ取りながらする演奏は、とても幸せなものになりました。先生がいなければひたすら努力をすることはなかっただろうし、親や友人がいなければ部活動をしていなかっただろうと思います。私は、残ってほしいという思いを感じ取ることができたから、充実した活動ができました。

吹奏楽部での実体験があったので、様々な人の思いが込められていた“一本の木”には無関心ではいられていませんでした。私が部活動に残るために説得してくれた人の思いは、“一本の木”に対する先生方の思いと同じように思えたからです。一つ一つに対する人の思いは、物であっても、人であっても、変わらないことに気づかされました。

しかし、このような環境が必ずしもあるとは限りません。“一本の木”は学校の先生方の思いや企業の方の協力がなければ切り倒されていたのかもしれない。

“一本の木”から木全体の社会に目を向けてみると、木のことを考えられているとは思えない、森林破壊や地球温暖化などの問題もできます。人間の環境はどうでしょうか。私は以前に読んだ戦争や貧困についての本が頭に浮かび上がりました。そこでは人の生活とは思えないような光景が書かれていました。国も地域も助けてくれない世界でした。それは人の思いがまるで蹴り飛ばされているかのような場所に思えました。そうして命を落としてしまう人々がいるのです。“一本の木”も、木の社会も、人間も、それに関わる全ての人の思いを大切にできなければ生きていられないのです。

では、思いを大切にするためには、皆が生きるためにはどうすればよいのでしょうか。私は一つ一つに向き合うことが大切だと考えています。“一本の木”は向き合ってもらうことによって、生き残れました。人間は幸せを感じたり、自信を持ったりして、存在したくなるのではないのでしょうか。“一本の木”がそうであったように、人間も人の思いやりによって成り立っています。だけど、木と人間には大きな違いがあります。人間は思いやりによって支えられているだけではなく、支えることもできるということです。私は、自分自身も“一本の木”を支えるような存在になることが人生の目標です。そして、皆さんも“一本の木”を支えることができるうちの一人になるのではないのでしょうか。支え・支えられる、そんな思いがこの世界に“一本の木”を存在させると私は思っています。

3.2 事例② 「向上心の力で」

引用を禁じた結果、当初は、ある1冊の書籍の要約でしかなかったが、約1月の推敲を重ねるなかで、単なる要約部分は皆無となり、自分自身の言葉で表現できるようになった。

「向上心の力で」古川拓実

何でもない、どこにでもあるような日常。朝起きて、歯を磨き、朝ご飯を食べて、学校に向かう。しかし、このような日常は、砂でできたお城のようなものかもしれません。

二年生の秋、私はある一冊の本に自分の視野を大きく広げられました。「日本はこのままではいけない」そ

う感じた著者が現状を変えるために書いた本です。それまで日常に危機感をまったく覚えていなかった私は、当然ながらその内容に驚愕するしかありませんでした。その内容とは、今、日本の人口がものすごい勢いで減っているということです。「別に驚くようなことじゃない」そう思う方もいるでしょう。しかし、この国では今まで急激な人口減少が起こったことはありません。これは私たちが、先代の誰も経験したことのない時代の真ただ中にいることを示しています。前例のない社会の中で、明確に何が起こるのかを予測することはできないでしょう。少なくとも、これまでのやり方では通用しないかもしれません。これは日本の大きな危機ではないでしょうか。

我が国の人口減少を危機だと認識した私は、改めて社会にどのような問題があるのかを見渡してみました。千兆円単位の国の借金、異常なまでの自殺率、まだ食べられるのに捨てられてしまう大量の食べ物。とても大きな問題が日本にはいくつもありました。この本に出会うまで、私は事の重大さに気づくことができていませんでした。もしかしたら、今ある便利な生活に満足して日本のことをよく考えることをしていなかったのかもしれない。

多くの問題に気づいて危機感がさらに大きくなった私は、このままでは日本がよくなっていくのは難しいのではないかと思うようになりました。私の大好きな日本。私は日本をよくしたいです。だから今のままではいけないと思いました。

去年の夏、私の通う津商業高校の野球部は、甲子園に初出場という快挙を成し遂げました。これはものすごい奇跡だったように思います。私はテレビの前でこの場面を目の当たりにしたのですが、その光景は今思い返してみても克明に浮かび上がります。

県大会の決勝戦、相手は春季大会で敗れた高校でした。ゲームが始まって、津商は四回までに三点を入れますが、五回に点を返して同点とします。「さあ、これから勝ち越していくぞ!」そう思った矢先、相手校に一点リードされてしまいました。しかもそのまま、七回にも一点、八回にも一点と、じわじわと点差を広げられていきました。残っているのはあと一回。津商チーム最大の危機です。もう駄目だと思いました。そんな否定的な思いが幾度となく押し寄せてきましたが、勝ってほしいと私は願い続けました。野球部がいつも夜遅くまで練習しているのを何度も見てきたし、雨の日だって休まず基礎練習をしていたことも私は知っているからです。しかし、津商のゼロの並ぶ得点版と、毎回点を挙げている相手校の得点版を見比べていると、「やっぱり負けてしまうのではないか」そんな思いがどんどん大きくなっていきました。「やっぱり駄目だ」私が諦めかけた時、逆転劇は起きたのです。

津商は三点もの点差をどんどん縮めていきました。私はいったい何が起きているのかわからなかったです。相手校との点差が同点になったとき、「もしかしたら、勝てるかもしれない」そう思いました。そしてついに大逆転勝利を収めてしまいました。あの崖っぷちから、どんでん返しの五点をもぎ取り、甲子園への切符を手にしたのです。

ここで私は、「向上心の力」がどれだけ大切なものなのかを、声を大にして皆さんに伝えます。この大きな危機に直面したとき、野球部員だけでなく、スタンドの応援団、親、同級生のみんなが危機感を持っていたことが、困難を乗り越える力を生みきっかけになったのだと私は考えます。一人ひとりの危機感が、勝とうという心、すなわち向上心を生み出したのではないのでしょうか。この心がみんなに芽生えたことで奇跡的大逆転は起きたのだと、私は思います。

今ある便利な社会は、先代が向上心を持って行動したからこそのものです。私たちは、自分が快適に生活できているからといって、そこに身を委ね続けてはいけません。先代が向上心をもってして便利な社会を残してくれたように、私たちも向上心を持ち、未来を生きる子ども達によりよい社会を残していかななくてはならないと思います。日本が抱えているいろいろな危機は、どれもこれも簡単に解決できる問題ではないと思います。むしろ難しいものかもしれません。しかし、それをほったらかしにしては、ただでさえたくさんある国の借金にさらに膨らみ、高い自殺率はそのまま、食べられるはずの食べ物は捨てられ続けることとなります。これらの問題を手に付けずに済ませておいていいのでしょうか。いいえ、良いわけがありません。子ども達に、今ある問題を横投げしては、よりよい社会を実現することはできません。よりよい未来を創るためにも、私たちは向上心を持つべきです。そうすればきっと、この野球部のように日本のピンチを救うドラマを起こすことができます。役者はあなたかもしれません。みんなで日本を変えてみませんか。「向上心の力」で。

3.3 事例③ 「逃げる勇気」

約1か月の推敲ののち、1年間埋もれていたが、その後、掘り起こしを行って完成に至ったものである。

「逃げる勇気」田中侑希

皆さんにとって「勇気」とはどんなものですか？「宿題を忘れた」「借りたものを失くしてしまった」—学校生活を送っていればよくありがちな失敗をしてしまったとき、素直に「ごめんなさい」と謝罪を口にするには勇気が必要です。また、何かを決断するときも、勇気が必要です。そして今このように、こんなに沢山の人の前で話すこと、これも勇気が必要です。勇気とは、ありふれた日常の中にも、はたまたドラマのような非日常の中にも、こうした様々な場面で必要になり、様々な意味を持つものなのです。その中で私は今回、「逃げる勇気」について話したいと思います。

昔々、と言ってもそんなに昔のことではありません。わずか1年ほど前のことです。高校に入学し、部活動に入部しました。そこで問題点となったのが、お金のことです。決して裕福とは言えない家庭で生まれ育った私には、母に「授業料以外にも必要になるお金を出してほしい」と簡単には言えませんでした。そこで私は、夏休みからアルバイトをすることにしました。希望先を幾つかに絞り、最終的にある飲食店へ面接に行ったところ、結果はあっさり採用。「何の経験もなく、性格だってお世辞にも明るいとは言えないような私が、何故

採用されたのだろう」—そうは不思議に思ったものの、「とにかく採用された」という喜びで頭の中はいっぱいでした。しかし後になってその疑問の答えを私は、身をもって知ることになるのです。

とはいえ、そのときの自分がその後どのような事態を迎えることになるか、分かる筈ありません。多少の失敗はあったりしたものやりのやりがいもあり、同じ職種を担当している方からも優しく接していただき、「高校を卒業するまでここで働けたらいいな」と思うようになりました。ですが、平穏な日々はそう長く続きません。そもそも私は人と話すことが大の苦手で、そのことはもちろんアルバイトでも案に違わず、ついに最悪の事態を迎えました。副店長に嫌われてしまったのです。何がきっかけだったのか自分でもわからないまま、日を重ねれば重ねるほど、事態は悪化していくばかり。まるでいじめのような仕打ちが続き、辞めたいと何度も思い、それを店長に打ち明けたことも何度もありました。しかし、その度に「この店でやっていけないようじゃ社会にはでられないぞ。そもそも今、店が人数不足だということを知っているのか」と言われ、まさに「ブラックバイト」を真正面から体験することになってしまったのです。更には「辞めたいなら代わりを見つけてくるのが常識だ」と追い打ちをかけられる結果となりました。そう、私はただ単に人数確保のための存在にすぎなかったのです。現代社会の裏側を見たといっても言い過ぎではありません。「辞めたい」という気持ちと、「他に当てもないし我慢してここで働き続けるほうがいいのかもかもしれない」という迷いに、長い間悩まされていました。実際には半年にも満たない期間が、本当に長く感じられました。

そんな私を救ってくれたのは、中学時代の友人達です。落ち込んでいる私に、「お店にとって従業員なんて探せばいくらでも見つかるけど、あなたには、あなたの代わりになる人はいないんだよ」と励ましてくれたのです。それを聞いてやっと、辞めてもいいんだ、と、そう思えました。そして、「逃げるという勇気」の大切さを実感しました。暗闇の中に、光を見つけた—その時の私は、まさしくそんな気分でした。それから間もなくしてお店を辞め、しばらく経ち、知り合いの紹介で新しい仕事先を見つけました。そこには前のお店より優しい人が沢山いて、ずっとずっと楽しく、あっという間に時間が過ぎていきます。まるであのつらい日々が、遠い昔のことにように思えます。「逃げてよかった」と心から思えるほどに。そう、逃げることで救われることもあるのです。

改めて、「逃げる勇気」について考えてみます。現在の日本社会では、いじめやストレスによる自殺が相次いでいます。「逃げることは弱い人間がすることだ」「辛いことに耐えてこそ、素晴らしい人間だ」といった呪いのような固定観念に囚われ、自分を押し殺し続け、そうして耐え切れなくなった人たちが、沢山のいます。しかし、心を殺し続けたあとに残るのは、栄光ではありません。ずっと癒えることのない心の傷、たったそれだけです。私はそんな人たちに、どうか逃げる勇気を持ってほしい。そして逃げることは決して悪いことではない、ということ、皆さんに知ってほしい。誰かが悩んでい

るときに、「逃げるな、頑張れ」と言うのではなく、「逃げてもいいんだよ」—そんな風に心優しく声をかけ合える人が、増えてほしい。少なくとも私は、そんな人間でありたい、そう思います。

3.4 事例④ 「美しい言葉を使いましょう」

約1週間の短時間で完成させたものである。この生徒は、小学生の頃から、読書に勤しんでおり、現在でも新書を45分で1冊読み終えることができるとのことであり、読書習慣が奏功している。

「美しい言葉を使いましょう」鶴飼初笑

こんな会話がありました。「教科書貸してね」「り」もう一度言います。「教科書貸してね」「り」。「ら、り、る、れ、ろ」の「り」の一文字です。皆さん、突然こんな会話を聞いたらどう思いますか？なんか奇妙ですね。「何を言いたいのか？」とか、「そもそも言葉なの？」という人がほとんどだと思います。しかしこの言葉は、私が実際、若者によく使われている「LINE」での会話で、相手から届いたメッセージなのです。「り」、やっぱり奇妙な言葉です。

「数学の教科書を貸して！」ある日、私は、教科書を忘れてしまい友だちに借りようとこのように「LINE」で送信しました。「何時間目に貸せばいい？」「2時間目をお願い！」。「LINE」でも、ここまでは、会って話す時と同じ会話でした。ところが返ってきたのは、「り」の1文字だったのです。私は、最初この「文字」が送られてきたときに、「打ち間違えたのかな？」と思って、次の言葉を待っていました。しかし、いくら待っても次のメッセージが来ないので「これは、何か意味があるのではないかと、インターネットで検索してみました。そしたら、「SNS上で使われている、了解の意味の短縮形」なんだそうです。この「り」が普通に使われるのであれば、ほかの言葉も、簡略して使われるのでしょうか。「ありがとう」を「あ」という風に、簡略するとします。「あ」だったら、「暑い」の意味にもなってしまいます。「ごめんなさい」を「ご」という風に簡略するとします。「ご」だったら、「豪華」の意味にもなってしまいます。「感謝」を「か」という風に簡略するとします。「か」だったら、「かなしい」など、マイナスの言葉にもなってしまいます。

奇妙な言葉はほかにも見つかりました！！昔から、笑いを表現する言葉に「かっこわらい」(笑)は、よく使われていますが、今は笑いの頭文字Wを、3つ以上連続して並べると、草が生えているように見えることから笑いを一言で「草」と言うのだそうです。これらの言葉は現代の若者の一部で使われているようです。

しかし、「り」やWを知らない人は会話が成り立つのでしょうか。これらの奇妙な言葉は、この言葉を送る人が楽にできるように作られただけであって、これを知らない人のことは考えられていないと思います。「でもこれって、SNS上のことであって、日常会話では使わないじゃないか」と思うかもしれません。

日常会話でも、「奇妙な言葉」がありました。今、女子高校生の間で流行っている「まんじ」というのがあります。使い方は、とても簡単です。意味はいくつかあるらしいのですが、その中でも印象に残ったものを上げ

たいと思います。友だちが鞆に新しいキーホルダーをつけてきました。それがものすごくかわいいので、こういいます。「まじ、まんじ！！」意味が分かりますか？「まじ」は、「本当に」と言う意味として使われていますが、「まんじ」は「かわいい」という意味に代わるのだそうです。私には、理解できません。使い勝手が良いと流行っているらしいのですが、果たして本当にそうでしょうか。

「美しい言葉を使いましょう」。子どもは、周りの大人がしゃべっている言葉をまねすることによって、言葉を覚えていきます。そんな時に大人たちが、こんな若者言葉や簡略語を使っていたら、子どもは一体、どうなるのでしょうか。簡略語は、正しい言葉ではありません。昔の人は、モノを褒める言葉でも、「素敵」、「綺麗」、「華麗」など、その時の気持ちをいかに相手に伝えられるかを考え、このような美しい言葉が大人から子どもへと受け継がれてきたのではないのでしょうか。もともと言葉は「感動した」「嬉しかった」「楽しかった」「悲しかった」などの気持ちを相手に伝えたくて、知ってほしくて、分かってほしくて、理解してほしいがためにできたものだと思います。こんな美しい言葉があることを知らずに、簡略語しか知らない子どもが大人になったら一体どうなるのでしょうか。

では、みなさんに質問です。「どうしたら美しい言葉が身に付くと思いますか」、簡単です。簡略語を使わず、このきれいな言葉で日々気持ちを伝えればよいのです。本を読むだけで正しい言葉が身に着くと勘違いしている人もいますが、実際に使わないと本当の意味では身に着かないでしょう。

最後に、人に自分の気持ちをしっかりと伝えて、そして、美しい日本の言葉がこの先も残っていくように。

4 まとめ

以上の4事例は、起承転結といった文章構成はほぼ明確であるが、しかし、生徒自身が、仮説を立て、調査分析を行い、考察するといった研究の基礎基本を体験的に習得するまでには至らず、小論文の域を脱することはできなかった。そこで、筆者は次に、研究論文形式の執筆指導の展開を検討した。執筆された研究文は『知財と商品開発』を創刊し、これに収録しているが、この事例については、続報に委ねることとする。

ところで、公表された高等学校学習指導要領案の共通教科国語では、新科目「現代の国語」で「引用の仕方や出典の示し方、それらの必要性について理解を深め使うこと」と記された。学習指導要領で筆頭教科として位置づく国語の必修科目でこれが示されたことの意義は大きい。

一方、国語以外の教科において、教科内容に即したレポート執筆を指導すべきことが今後重要になってくる。筆者は、生徒に仮説を立て、実証的な考察を行うといった「研究学習」を深化させる機会を設定するによって、高校生にも見られるようになった窃用の問題は、僅かながらも解決の糸口が見えてきた。内閣府に「知財創造教育コンソーシアム」が設置され、我が国の知財教育を推進していく体制が動き始めた。今後議論が展開されるなかで、筆者は、知財教育の手法として「研究学習」の位置づけがより明確となるように努めていきたい。